

小学校におけるネット型ゲームの教材構成の工夫に関する実践的検討

－ボールを落とさない感覚づくりに着目して－

江原 沙季 (信州大学)

1. 目的

小学校のネット型(ゲーム)では、中学年では易しくラリーを続けることの出来るプレルボール系、高学年では生涯スポーツにつながるソフトバレーボール系のゲームが多く実践されている。いずれのゲームも仲間とパスをつないで攻防の楽しさが味わえるものである。

プレルボール系とソフトバレーボール系では、児童がボールに応じる様相や、運動特性が異なるため、ボールを落とさずに弾くゲームを体験しないまま、高学年でソフトバレーボールを基にしたゲームに取り組んでも、戸惑っている様子が多く見受けられる。

そこで本研究では、「ボールを落とさない」感覚づくりに着目し、中学年から易しく取り組めるソフトバレーボールを基にしたゲームの教材構成を考案・実践することを通して、その有効性について検討することを目的とする。

2. 研究方法

対象者：長野市内 M 小学校 4 年生 (25 名)

研究方法：①文献及び先行研究から、小学校体育におけるネット型ゲームのソフトバレーボールを取り上げ、学習指導上の課題を明らかにする。②課題を踏まえ、ソフトバレーボールになじむことに加えて、ボールを落とさない感覚の習得ができる教材を運動学的な視点から考案し、単元を構成する。③促発指導に基づいた授業実践を行い、印象分析と学習カード(形成的授業評価)から教材と単元構成の有効性を検討する。

3. 結果と考察

文献及び先行研究の検討から、「ボールのコントロールが難しい」「ラリーが繋がらない」ということが、ソフトバレーボールを楽しめない原因として確認された。また、高学年や生涯スポーツにつながる「ボールを落とさない」感覚を育てる教材や学習機会が少ないことが明らかとなった。

そこで、児童が易しくソフトバレーボールに取り組めるよう、ボールやコート、ネットの高さの工夫を行った。また、ボール操作の力加減やコツを習得するための「二人でポンポン」や「四人組パス」を考案した。それに基づき、パス技術の習得・定着を図り、ボールを落とさない感覚を養う視点から「パスゲーム」「アタックキャッチゲーム」を、単元のメインゲームとして「アタックレシーブキャッチバレー」を考案した。これらを 8 時間の単元として構成し、授業実践を行なった。

授業実践の観察(印象分析)から、単元を通して行った「パスゲーム」では、初めは力加減をコントロー

ルできず円の外にボールが飛ぶ姿が目立ったが、練習を重ねることで、円の中の仲間へパス出来る様子が多く確認されるようになった。さらに、回数を伸ばそうと休み時間にも練習していたことは、ソフトバレーボールへのなじみを発生させ、運動への意欲を高めることが出来た成果と考えられる。

単元序盤の「アタックキャッチゲーム」では、自分に飛んできたボールはキャッチできるが、ボールが飛んでいく方向に反応して落下点に入ろうとする姿はあまり確認されなかった。また、真下に落とすような鋭いアタックが見られ、キャッチすることが難しい場面もあった。そこで、「アタックレシーブキャッチバレー」は、アタックをキャッチすることが出来るよう、ネットから 1m の所にケンステップを設け、トスは途中で上げるというルールで行った。それにより、アタックがコートの奥に飛ぶ場面が増え、それを追って滑り込む姿や、チームでポジションを工夫し声を掛け合いキャッチする姿が確認されるようになった。これらは、ボールを落とさない感覚が定着したことやチームでボールを繋ぐ意識を持つことが出来た成果と考えられる。

形成的授業評価の結果からは、「成果」「協力」の次元で減少が見られた回があったが、ほぼすべての項目で高い数値が見られ、教材に対する一定の評価が得られたことが確認された。学習カードからも、「たくさんキャッチができて楽しかった」「三角形で守るとたくさんキャッチ出来た」といった記述が見られ、楽しく学習に取り組み、「ボールを落とさない」感覚を習得できたことが明らかとなった。加えて、「これからもソフトバレーボールがしたい」という感想やクラス対抗ソフトバレーボールマッチが開催される予定であるということから、ソフトバレーボールの学習が日常化に繋がったことも確認された。

4. 結論

本研究で考案・実践した教材構成は、対象者への印象分析や学習カード(形成的授業評価)からソフトバレーボールの学習に関する有効性が確認された。

今後の課題は、ボール操作技能の習熟のための教材や、触球をキャッチではなくレシーブやトスにし、流れを途切れさせずにボールを繋ぐゲームに発展させていく教材構成を検討していくことである。

<参考文献>

渡辺敏明 (2017) ソフトバレーボールの学習指導について考える, 小学校体育ジャーナル 85 号, pp.5-8, 学研教育みらい